

グローバル通信

2009. 7 vol. 14

Ryukoku University
GLOCAL TSUSHIN

暑い夏の到来です。暑いからといって時間を無駄に過ごしてはいけません。夏休みに入り、研究を本格的に進めていくことができる時期です。時間を有効に使い、文献を読んだり、調査に行ったりと個々の研究を進めていき、論文作成にとって成果の上がる夏にしましょう。今号は、「修士論文執筆計画のススメ」をテーマに、昨年度修士生の修士論文のタイムスケジュールや先生からのアドバイスを特集として企画しました。また、科目の一環で開催されました講演会、座談会、シンポジウムの報告を掲載しました。さらに、学生が計画した企画にも注目です。是非、ご覧ください。（編集部）

当事者意識の地域づくり	1
今後の地方行政を考えていく上での仲間づくりの場に	1
修士論文執筆計画のススメ～暑い夏の熱く篤い過ごし方～	2
公開講演会(2008年度後期)から	3
米国タイズ財団理事長ドラモント・パイク氏との座談会	3
龍谷大学創立370周年記念国際シンポジウム	4
事務局インフォメーション	4

CONTENTS



当事者意識の地域づくり

小田 豊 (長岡京市長)

長岡京市は交通の便、緑、歴史に恵まれ、市民の定住志向が強く、人口減少時代の中、約79,000人の人口は微増を続けています。また、森林整備やスポーツ振興をはじめ、市民活動が盛んな地域でもあります。しかし、近年は少子高齢化・生活スタイルの変化などから、社会に地域的なつながりが希薄化していると言われており、長岡京市も今後この影響を受けることは避けられない状況です。

そこで長岡京市では、地域を一番理解している人が、得意分野を活かし、知恵と力を結集することが最善と考え、まず地域の団体や住民が一つになる「場づくり」を考えました。今年度より主要施策と位置づけ、一つの小学校区をモデルとし、地域コミュニティの活性化に取り組んでいます。

モデル地区では、活動拠点を設けるとともに、「地域コーディネーター」を配置し、課題を地域で解決できるよう、団体やボランティアなどとの相談・調整役、さらには行政との橋渡しを行うこととしています。

具体的な取り組みは模索中ですが、地域の人々が核になることは確実です。市は、各人の当事者意識を引き出すことと、想いをつなぐことが重要であると考えています。

さて、このような地域づくりにおいて、私はNPO・地方行政研究コースで学ぶ大学院生のみなさんに、広い視野を身につけることと、当事者意識について考えることを期待したいと思います。

まず、地域にはいろいろな考えの人がいます。想いを持った人が多いほど活発な議論は生まれますが、調整は難しくなることが多いです。利害が対立し、合意が得られない場合もあるでしょう。この中では、狭い視野・芯の細い論理では納得を得ることができません。本コースで学ぶ中で、広い視野・芯の太い論理を身につけてください。

また、地域づくりは、行政からまちづくりの諸施策を提示しても、地域の人々が納得し、自分達のまちをつくるという当事者意識がなければ、良い結果を生みません。みなさん自身が、本当の意味で地域づくりの当事者となるか、または人材の当事者意識を引き出す力を身につけるか、いずれも難しい課題だと思いますが、コースで学んだことを活かし、大きな成功を収められることを、心から期待いたします。

今後の地方行政を考えていく上での仲間づくりの場に

植田奈保美 (特定非営利活動法人 ひらかた市民活動支援センター 理事長)



私たちひらかた市民活動支援センターは「人と人が支え合い、心豊かにともに生きるまちの『わ』(和と輪)を市民の知恵と活力を結集した市民活動の面から広げていこう。」という趣旨の下に、市民活動団体の中間支援を実行してきました。

最初の5年間は場(会議室、備品、図書など)、情報(助成金情報、広報紙やFM番組など)、研修(NPOの基礎・法人格取得講座、マネジメント講座など)、フェスタなどの事業を通して、団体の創設や法人格取得、交流を中心にしてきました。当法人をはじめ、登録しているNPOの多くは、当面の活動については目的達成のため必須の事業であると思い、継続してきています。

当法人としても、その後はNPOをとりまく社会状況を取り入れながら、中・長期の目標を作成、私たちだからできる、あるいはしなければならないことを模索しながら実践していこうとしています。そのために、特に人材発掘、育成に力をいれつつ、ネットワークもテーマによって、NPOに限らず、他セクターとの連携、協力などを通して新しいまちづくりができればという願いをもっております。コーディネート力の強化も必要で、その準備をしつつあります。

NPO・地方行政研究コースとつながりがもてたことで、井の中の蛙になりがちな視野を広げる機会を得ました。限られた人的、物的資産を効果的に活かす方法、継続するのに必要なヒントや、より有益な情報を手に行うことができると同時に、今後の実践について見直し、将来像を描けるなどの利点があると考えております。また、現場でやっていることを客観視でき、ゴールを見定めた上で現在、どういう位置、段階にあるかということが、本コースと関わりを深めることで、分かってくるのではないのでしょうか。

NPOは目的意識ばかりが強い分、足りない部分に対する視点、理論付け、実践活動の見直しということにつなげることができると期待しております。

修士論文執筆計画のススメ

～暑い夏の熱く篤い過ごし方～

修士論文を本格的に進める夏休みがやってきました。そこで、昨年度1年で早期修了されたお二人からのアドバイスです。お二人のスケジュールを参考にして、夏休みの計画を立てましょう。

論文作成スケジュール・正木隆之

4/23 論文指導 アウトライン確認
5/07 章立て 第1案作成
5/23 調査:インタビュー①

6/18 スケルトン 第1案作成
7/09 特別演習で発表(問題意識と論文構成の概要について)



9/中 調査:インタビュー②③ 10/08 論旨の視覚化(図示)
10/中 インタビューテープ起し 10/22 特別演習で中間発表
→論文構成の修正

11/28 法学研究科中間発表
→論文構成の修正



12/27 本文記述スタート! 01/12 2章、3章完成
01/19 4章完成 01/20 論文完結 16:30提出

02/03 口頭試問

論文作成スケジュール・矢杉直也

4月
入学

- ・論文とは、どのように書くものなのかを調べる。
- ・自分の関心テーマに即した書籍を選び始める。

6月
ごろ

- ・1回目の中間発表に向けて、論文の目次と論旨を作成してみる。
- ・中間発表で指摘された問題点を中心に、再検討する。
- ・文献やキーワードは常に探す。

夏休み

- ・各章に関係のありそうな文献を探し、幅広くあたってみる。
- ・論文に出てくるデータや判断の根拠となる資料を収集し、まとめる。
- ・必要に応じて、アンケートやフィールドワークなどの調査を行う。

後期
開始

- ・毎週、文献要約と批評を1本以上こなし、「書くこと」を習慣づける。
- ・書けるところから、各章の内容を書いて、内容を膨らませる。
- ・論文の出発点と着地点をどこに置くかを強く意識する。

11月
半ば

- ・2回目の中間発表に向けて、論旨を固める。
- ・中間発表で指摘された問題点を至急、検討する。

12月
半ば

- ・初稿を指導教員に提出し、指導を受ける。
- ・全体の構成を俯瞰し、足りないところを書いて補っていく。

年末年始
総仕上げ

- ・校正と構成検討を繰り返し、完成度を上げていく。

2月
下旬

- ・口頭試問

キリギリス正木からの伝言

正木 隆之(法学研究科2008年度修士生・財団法人京都ユースサービス協会)

締め切り30分前に駆け込み提出した私の涙の修論体験が、前轍として後進の糧になるなら、これに勝る喜びはありません。以下、参考になれば幸いです。

1. 社会人に夏休みはない! と思って無為に過ごしてしまったのですが、後から考えると授業や他のレポートから解放される夏休みが、やはり一番多くの時間を湛えた豊穡の時でした。まだ焦らなくていいこの時期に、じっくり腰をすえて基本文献にあたり参考資料をファイリングしたりしておけば、あとあとずっと楽になったはずだと思います。
2. 論文の最終盤になってから、1章(問い)と最終章(答え)の整合性がとれずに苦しみました。「ここは大丈夫」と得意な部分の構成をおざなりにしていたツケが回ってきたのです。いずれ修正はあるにしても、スケルトンを綿密に組みあげてからスタートすべきだったなあと考えています。
3. 中間発表が終わったら執筆開始と考えていましたが、その頃から急に仕事が立て込んで、やっとならば年末にはまさかの風邪…、背水の陣をはった年始は慢性寝不足で何度もフリーズしました。長丁場ですから予期せぬアクシデントが必ず起こるという前提でスケジュールをたておくべきでした。というわけで、皆さん早めに準備しましょうね。キリギリス性格の人は要注意ですよ!

矢杉からの提案・文献の読み方

矢杉 直也(経済学研究科2008年度修士生・京都市西京区役所)

夏休みに入ったからといっても、遊びたくなる気持ちを抑えるのは言うまでもありません。でも、私は抑えきれないときがあり、前期の間につくった研究のペースが乱れてしまい、なかなか研究を進めることができなかったのは、失敗体験としてみなさんにお伝えできることです。だからこそ、この2ヶ月の目標を持って、計画的に過ごすことは、何より大切と実感しています。

多くの方から「夏休みには文献を読め」と言われると思いますが、どこから手をつければいいのか、まだ迷いがあるのではないのでしょうか? ただ興味あるものを漫然と読んでいても、研究はなかなか進みません。前期に作成した自分の論文の目次に即して書籍を選び、読んだ書籍の要約と批評をまとめ、指導教員に提出してみましょう。それを定期的に繰り返すことで、自分の研究の状況を報告するとともに、指導教員から自分の研究に使える言葉や文献を得られるようにキャッチボールすることができます。そこから、自分の研究のキーワードが絞られてきて、論文の軸が確立していくと思います。



教員から～夏休みの過ごし方～

富野暉一郎(法学研究科教授)

夏休みはまとまった時間が取れる時期であるため、この時期でなければできないことを行う必要があります。それは2種類あります。まず、論文をたくさん読むことです。私もマスター時代にたくさん読みましたが、論文を読むことは、引用したり分析したりするために役立つだけでなく、さまざまな方法論を学ぶことができます。そして、たくさんの方の方法論から自分にあったものを見つけて、その中から抽出することです。そのため、方法論を意識して、多くの論文を是非読んでください。次に、ヒアリング、調査をす

ることです。目的意識をはっきりもっていなければ核心に迫ることはできません。また、自分の思っていた以上のものが引き出せるような質問をすることが大切です。そのため、夏休み前にしっかりと計画を組み立てて調査を行ってください。

そして、NPOコースは様々な分野の方の研究を知る機会があるため可能となっていますが、後期から意識しては他の院生の研究の進め方や研究内容を受け止めることです。また、指導教員に積極的にアプローチをすることも重要です。是非、教員に遠慮せずに自分の疑問点をぶつけてください。さらに、指導教員だけではなく、違う教員にもずうずうしくなることです。指導教員以外の教員の言葉の意外なところにヒントがあったりするものです。そうやって、新しい切り口から自分の論文を見ることを行ってください。

公開講演会(2008年度後期)から

■先進的地域政策研究

「これからの地域社会—ガバナンスの変容と担い手—」

講師:野崎 隆一氏 (NPO法人神戸まちづくり研究所理事・事務局長)

講演では特に高齢化社会における地域社会について考えるきっかけになりました。野崎氏からご紹介頂いた明舞団地は、私の地元でもある神戸市と明石市にまたがる団地であり、昭和50年をピークに人口が減少し続けている団地です。団地においては高齢化が大きな問題となり、どう支えていくのが課題でもあるということでした。

正直に申し上げて、NPO法人まちづくり研究所などが取り組んでいる団地再生の取り組みは、目新しいものではなく、地味な活動であるという印象を持ちました。ただ、団地に住む高齢者にとっては、顔が見える範囲に人がいてくれること、その

ことが安心して生活していける、なによりの支えになっているのではないのでしょうか。神戸では震災後、復興住宅が建設され、同様に高齢化が問題となっています。つまり「見守る側と見守られる側の線引きが難しくなっている」と思われます。これは神戸市に限った問題ではなく、高齢化が進む日本にとって共通の課題とも言えます。

そのような状況にある地域社会において、「公共」がどのようにお年寄を支えていくのか。行政だけではなく、NPOなどのサードセクターがどう関わるのか。そのような問いに今回の講演は一つの示唆を与えて頂いたと思います。

(法学研究科 塩田 健悟)



■地域リーダーシップ研究

「本能学区のまちづくりとその担い手—新しいまちづくりを伝統産業でつなぐ—」

講師:西嶋 直和氏 (本能まちづくり委員会委員長)

西嶋氏は本能まちづくり委員会委員長としての顔のほか、本来の染色補正の伝統工芸士としての顔、地区の男衆としての顔など非常に多彩な顔を持っておられました。そして、そのどの顔の時も多くの人に信頼され、ネットワークの中心を担いながら、人と人をつなぎ合わせる事ができる人材であると感じました。

そのため、元々は地縁的なつながりの中の方であるにも関わらず、まちづくり委員会のような現代的な組織を通して新しくできたマンションの新住民ともすんなり溶け込み、巻き込むことができるのだと感じました。



本能まちづくり委員会の活動の根底にあるのは、新しくマンションにきた住民に地域に慣れてもらい、まずは、「お互いに挨拶のできる関係」をつくるということにあり、そのためにいくつかの仕掛け(のれんの華スタンブラリーや染めの公開工房ツアー、匠の実演コーナー・マイキモノプロデュースなどが行われる「まちなかを歩く日」おいでやす染めのまち本能)や区民運動会など)を用意されています。これら「仕掛け」に新しい住民が参加することを一つのきっかけにして、双方に信頼関係が形づくられ、結果としてまちづくりを円滑に行える素地が形成されているのではないかと感じました。

今回の本能まちづくり委員会の事例は、元々の住民と、マンションの新住民とが連携し協力しているという点において、今日の日本のまちづくりが抱える基本課題に対する回答を示唆してくれているように感じました。

えてして、伝建地区ではまちなみが壊れるため、マンション建設に関して非常に敏感になり、端(はな)から反対という動きがしばしばとられますが、本能学区では、時代の流れをゆるやかに受容しながら、これからのまちづくりを柔軟に考えている点が非常に建設的だと感じました。(法学研究科 鳥居 良寛)

■先進的地域政策研究

「セーフコミュニティ活動による安心安全のまちづくり—日本初の認証をうけた亀岡市での事例—」

講師:山内 勇氏 (亀岡市企画課長)

亀岡市の山内勇さんから講演「セーフコミュニティ活動による安心安全のまちづくり—日本初の認証をうけた亀岡市での事例—」を聞いて、その取り組みから、亀岡市でセーフコミュニティにかかわる行政職員は従来の公務員像から大きく飛躍し、「地域住民とともに地域を創る公務員」という、あたらしい公務員像であるように感じました。

このセーフコミュニティは地域、関係部署と関係団体とをつなぐ機会ともなり、まずは安全・安心にかかわる部分からではあるが、市民同士、また市民と各行政機関との間に、円滑な関係性をもつことができれば、すべての人たちをつなぐツールともなり、さまざまなことにかかわっていくこともできる素晴らしいものになり

えると実感しました。

日本の多くの地域でのセーフコミュニティのような取り組みが図られていけば、今まで以上に安心・安全に関する意識変革をとみに地域づくりに生かされていくと思います。

今それぞれの現場で奮闘している公務員は、視点は違えど、共感できる多くの課題を持っている。それらの視点を結びつけて、解決していくことが求められる。そのことが実践されているのではないかとと思う。これから私も行政職員として、このように地域を創っていくことができる人材になることを目標に、努力していきたいと思っています。

(法学研究科 橋詰 清一郎)



米国タイズ財団理事長ドラモント・パイク氏との座談会

新型インフルエンザによる休講措置のため、今年5月25日(月)に予定されていた、アメリカ・タイズ財団理事長ドラモント・パイク氏の講演会が中止となりました。その代わりとして、急遽パイク氏を囲んでの座談会が行われました。当日の参加者による座談会の報告です。

「良いこととしての支援」≠「社会変革のためのあらゆるアクション」

松嶋健太郎 (法学研究科)

初めてお目にかかった、タイズ財団、ドラモント・パイクさんは、知的な穏やかさを湛えた、親しみやすい雰囲気を持った方だなという印象でした。タイズ財団の「先駆的、社会変革的な財団」「NPOベンチャーキャピタリスト」といったイメージから、ギラギラしたとんがった雰囲気の方を勝手に想像していたこともあり、逆に強い印象を私に残しました。耳をそばだてて聞く参加者に、時にユーモアを交えつつ、丁寧にお話を頂き、質問にも熱心にお答えいただきました。その場の雰囲気は、懇親会というより真剣な学会の雰囲気に近かったように思います。

タイズ財団およびタイズセンターが、NPOの独立性を尊重しつつ支援する一方、ドナーの意志を受けて資源をNPOに仲介する様子をいくつかの事例を挙

げてお話いただきました。

私は、タイズ財団が、NPOやドナーに向き合うときの考え方の明確さ、支援対象が事業化するまでの期間の短さなどを知り、衝撃を受けました。そして、タイズの全てのアクションが「社会変革のために」という軸で貫かれていることによるダイナミズムがあると感じました。社会課題の発見者、当事者への声に耳を傾け、事業化をすぐにできる体制をつくることで、変革の力を社会に備えていく。タイズの存在意義は、そこにあるのではないかと感じました。



世界のコミュニティラジオに平和の声を聞く

—地域と世界を結んで—

世界のコミュニティラジオに平和の声を聞く

—地域と世界を結んで—

澤田 一毅 (経済学研究科)

6月13日(土)午後、コミュニティラジオというメディアに対する期待を反映して、会場の深草学舎21号館603教室は、多くの人の熱気でいっぱいとなり、松浦さと子先生の挨拶でスタートしました。

ステーブ・バクリーAMARC理事長からはAMARC(世界コミュニティ放送連盟)のあゆみ、マヴィック・カブレラAMARC女性代表理事からは既存メディアにおける女性像、マイノリティーとしての女性について、エフエム奄美の麓代表は東京中心の情報から脱した島のラジオについて、日比野純一AMARCH本協議会代表からはFMわいわいの成り立ちと、それぞれのアプローチからの講演があり、コミュニティメディアでしか論じられないものがあることを感じさせるものがありました。

シンポジウムでは、松浦哲郎先生をコーディネータに、現在のコミュニティラジオのおかれている経済的、社会的、法律的視点から事例をもとに参加者と一体となった議論がかわされました。参加者は、国籍や職業等、様々な社会的立場を越えて、コミュニケーションを真に確立するツールとしてのコミュニティラジオというメディアの役割の重要性を再認識する大きな機会となりました。



多彩なパネリストが並ぶ国際シンポジウム

若者と政治をラジオで繋ぐという挑戦

～地域メディアを使った情報発信～

鳥居 良寛 (法学研究科)

私たちは「The Youth Advote」という組織の活動を通して若者の投票への意識を高め、若者が投票層としてしっかりと認識される社会をめざしています。

そこで今回は、京都三条ラジオカフェから、「ぼくらの政治目線」という番組を作り、情報を発信していこうと考えています。この番組を通して、私たちと同年代の若い人たちの近くにも「政治」があることを実感してもらい、やがてはそれを「投票」という政治参加の行動まで結び付けられればという思いです。また、今回の放送は龍谷大学のSMAP計画というプログラムの助成を受け、番組作りを進めています。



また、私たちの組織名である

「The Youth Advote」の由来ですが、これは「主張」や「提言」を意味する「Advocacy」と「投票」を意味する「Vote」を組み合わせた造語です。

番組のコンテンツとしては「検証! 逆マニフェスト」や「時事と危機」「知っていますか不在者投票」「今週の選挙」など、若者の政治離れが指摘されて久しい中、若者と政治を繋ぐための内容を考えています。

京都三条ラジオカフェという地域メディアだからこそ、既存のマスメディアではできない、自分たちの「想い」や「意見」を同世代の若者に対して発信できるのではないかと考えています。

若者と政治を地域メディアでつなぐという大変難しい取り組みになるかと思いますが、日本一学生の多い街、京都だからこそできる取り組みでもあると思います。どうぞ私たちの挑戦を応援してください。

「ぼくらの政治目線」 毎月第2・4火曜日 24:15～24:30
 京都三条ラジオカフェ (FM79.7) にて放送中
 団体ブログ <http://theyouthadvote.blog45.fc2.com/>

事務局インフォメーション

●新たな連携協定団体について

6月10日付けで、京都府京丹波町との地域連携協定が締結されました。昨年度の協働トライアルのパートナーとして関係が深まり、今後も連携を深めるため協定が成立したところです。これにより、協定団体は67団体となりました。

●NPO・地方行政研究コース懇談会について

日時 2009年7月23日(木) 12:30～16:00
 場所 龍谷大学深草学舎5F会議室
 内容 1 NPO・地方行政研究コースの取組について
 2 2010年度NPO・地方行政研究コース推薦入学試験について
 3 教育・研修プログラムと地域資格認定制度について

●講演集の刊行

「分権型社会を拓く自治体の試みとNPOの多様な挑戦
 —地域のリーダーたちの実践とその成果— 第6号」

NPO・地方行政研究コースでは、2008年度実施した講演会・院生自主企画シンポジウムの記録をまとめた論集を刊行しました。ご希望の方は欄外の連絡先までご一報ください。

●大学院オープンキャンパスのご案内

日時 8月1日(土) 13:00～16:00
 場所 龍谷大学深草学舎2号館109教室
 内容 担当教員による個別相談、コースの概要・取組の実績を展示します。
 ※進学を考えておられる方は、ぜひこの機会に直接教員にご相談ください。

NPO・地方行政研究コース ニュースレター『グローバル通信』通巻14号 2009年7月

発行/龍谷大学大学院 NPO・地方行政研究コース
 連絡先/教学部(深草)
 TEL: 075-645-7891 FAX: 075-643-5021

H P/http://www.ryukoku.ac.jp/gs_npo/
 編集/大矢野修、松浦さと子、土山希美枝(編集補助) 藍澤ゆかり、鳥居良寛、船越亜里沙
 印刷/株式会社 田中プリント